

病院崩壊… ひがし十勝病院最後の日々

釧路市医師会
釧路第一病院

柳川 利正

事務室で若い事務員が涙を流しながら電話の相手にひたすら謝り続けている。地元の高校を卒業後、この病院に就職し医療事務の仕事でテキパキこなしていたのに。今は毎日謝り続ける日々。こんなことがもう一ヵ月以上続いていました。

「患者の心に向き合う医療」を目指し、木村院長が幕別町に設立した110床の病院は、院長の人の心を掴む笑顔と理想に向かって突き進む姿勢に期待を寄せた多くの患者さんで溢れていました。帯広厚生病院放射線科の先生たちとのカンファレンスを定期的に行い、患者さんの診断・治療方針をより正確なものとし、手術療法・化学療法を積極的に行っていました。

北海道新聞や地元紙に頻繁に情報を発信し、ホテル経営者、新聞社社長など地元有力者との交流も盛んに行われ、木村院長の目指す地域と共に成長する医療が着実に進んでいたその時でした。クリスマスの浮かれた気分もあったのでしょうか。飲み会の帰り道に院長が転倒し下腿骨折。手術がすぐに行われ短期間で復帰できると本人も周囲も考えていたのですが、それをきっかけに持病の糖尿病が悪化し、あっという間に透析が必要な状態にまで至りました。初めの頃は透析の合間に車椅子で外来診療や入院患者さんの回診などを頑張っていたのですが、次第にそれも困難な状態となってきました。医者が次々と辞めていき、経営状態も急激に悪化していきました。電気、水道、税金等あらゆる支払いが滞り中、事務方は日々の診療を継続するため必死の交渉を続けていました。

私が「ひがし十勝病院」を知ったのは有楽町の皇居を望む生保会社の社医室に置いてあった医療雑誌の記事によってでした。ホスピスについて熱く語る木村院長の言葉が何故か心に響き、病院を見に行くことを決めてしまったのです。あの頃のベストセラー山崎章郎氏の「病院で死ぬということ」という本を読み、末期のがん患者さんの急変時に当たり前のこととして挿管・心臓マッサージを行っていたことへの後悔があったからかもしれません。

帯広ではたちまち木村院長の熱き言葉に魅了され転職を決めてしまいました。そして私の赴任後2年が過ぎた頃でした。開設時から副院長として院長と共に病院発展を担ってきたK先生が故郷の伊達市で開業することとなり、ひがし十勝病院開設時に院長が融資を受けた8億円の連帯保証人を辞めたいとの

申し出があったとのことで、私に保証人の依頼がありました。K先生の後には副院長となった先生は日本国籍がないため保証人にはなれないとのことで、K先生のためなら仕方ないなあと思いながら引き受けてしまったのです。その頃は木村院長を先頭に平日朝4時スタートの医局早朝ゴルフや勤務終了後のテニスなど、激務の中に楽しみがあり職員一体となった連帯感がありました。活気に満ちたこの病院が倒産するなど思ってもいませんでした。

しかし、病院崩壊への流れは止まりませんでした。院長の病態が悪化し、札幌の病院で入院治療を受けることになったのです。多い時は8人いた常勤医が2人となり、減ったとはいえ60人の入院患者と外来診療を2人で担当することに。当直もほぼ毎日となりました。おまけに北陸銀行帯広支店に何度も呼び出され、連帯保証人としての責任を問われる日々。結局、この間、私は全く経営に関与しないまま、木村先生が自己破産したため、8億の債務を負うこととなりました。精神的に追い込まれた私は退職したのですが、私の転職先の病院にまで北陸銀行担当者が「返済計画を出してほしい」とやってきました。たまたま札幌、帯広で4人の弁護士さんに相談しましたが「自己破産しかありません」「医師は自己破産でも医師免許を失わないのでいいですね」と皆が同じ意見でした。

札幌地方裁判所の一室、(原告側)北陸銀行担当者とその弁護士、(裁判官)裁判所職員、(被告側)私と担当弁護士。小さな文字がビッシリと書かれた数ページの書類が読み上げられ確認が行われ、私の債務整理・個人再生手続きは無事終了しました。その内容は裁判所の横にある掲示板に張り出され、誰でも見ることができるため大変でした。聞いたこともないような怪しげな貸金業者からダイレクトメールや電話が頻繁にありました。でも、今となっては動産・不動産を失い返済に苦しんだ日々が減りに経験できない人生の宝物のように思えるから不思議です。

最後に私が木村先生に会ったのは札幌の病院にお見舞いに行った時です。その時先生は「腎臓移植が受けられるかもしれない」と目を輝かせて話してくれました。あと一步の所まで近づいていた「ホスピス病棟開設」という木村先生の夢が今度こそ叶うかもと私も楽しい気持ちになったことを思い出します。ひがし十勝病院で木村先生に出会った多くの人々の心に先生の「素晴らしい笑顔」と「ホスピス実現のために突き進む姿」が今も焼き付いていることをご報告し、ご冥福をお祈り申し上げます。